

仏法も王法も共に滅ぶ 比叡山の織田信長

孔勁閣

初めて織田信長という名前を知ったのは、某ゲームで少し中二病がかった「第六欲天魔王」でした。戦国時代の日本人は自分に妙な名前を付けるのが好きだったのかと当時はおかしく感じていました。しかし後になってまじめに研究してから、この増長した名前の背後にあるものを知ったのです。比叡山の焼き討ち、一向宗の掃討、神権政治の衰亡、神聖なものではなく人間が主権を持つ国という織田信長の政治信条でした。宣教師ルイス・フロイスは「信長は全国の神像と仏像を集めた。彼の目的は決してそれらの偶像を崇拝することではなく、そうした神仏に彼を崇拝させることだった。彼は自分が神であり、彼の上に万物の創造神はいないと思っていた」と述べています。武田信玄が織田信長に天台座主 僧侶 信玄と署名した手紙を出すと、その返信には第六天魔王 信長と署名されていました。彼は仏教の魔王を自称することで他人に自分は神であると伝えていたのです。

彼は増長していながら、理知的でもありました。

794年に平安京が成立してから、寺院の勢力が前例のない強大さとなり、天皇の死や皇位の継承さえ和尚の手で密教儀礼を受けなければならないほどでした。中世日本の摂関政治と院政体制はまさに、このような神の権威の下で生じていたのです。10世紀中葉、武装した僧兵が出現。戦国時代には、公家、武家、寺院の三大勢力が並立していました。本願寺のように事実上の大名になってしまう例まで出てきました。

宗教の力は政治と結び付けるべきではなく、まして一国の基礎は宗教学であるべきではない、と織田信長は思い付いたのです。彼はすでにその時代の最前線を歩いていました。今の私たちは神の視角に立って、一連のローマ教会の暗黒時代の事例を挙げるのがたやすくできますが、信長の時代は、宗教は民衆の普遍的な信仰で、一地方に割拠する経済的政治的実体でした。彼が直面していたのは僧侶だけではなく、その背後にいるすべての人々だったのです。彼は天罰を恐れる明智光秀に対して「まだ分からないのか、仏像は金属と木に過ぎないのが」と話しています。彼が直面していたのは天罰ではなく、背後にある人の心でした。比叡山の大火はそうした金属と木を焼き尽くし、一向宗は全滅しました。武田信玄は仏法も王法も共に滅ぶと評し、今なお日本ではたくさんの歴史学者が信長を極悪非道と語っています。

彼は自らを天下人の反対側に置きました。

しかし彼はやはり天下を獲りに行き、後に引けなくなりました。織田信長の当時の目標は天下布武、日本統一でした。これほど大きい力を費やして宗教勢力に対処しても、実際にはその余力が感謝されることはなく、分散している大名への対処は全国を網羅する宗教勢力よりずっと簡単でした。まして当時の大名は多くが仏教を信仰していました。政教分離の利点は一朝一夕に見えるものではありません。彼は当時の日本のみならず、後世の日本のためにもなったのでした。彼

は無理な相談をせず、寺院の勢力を結びつけて絶えず併呑して拡大していきました。彼の目は初めから後世に向けられていたのです。

彼の後には豊臣秀吉、徳川家康がその道を受け継ぎました。日本の長期にわたる宗教戦争が終結し、信仰は統合されて、しかも国家機関の運営や大衆の生活に関わらなくなったのです。

もしかすると数年前法華宗に帰依した織田信長は、遠からぬうち比叡山に矛先を向ける第六天魔王になると知らなかったかもしれません。本能寺の大火の中で織田信長は世の無常に嘆息していますが、何年も後にその血と火を代価に敷いた道が日本を束縛の中から救い出したことも知るよしはありません。

彼の一生は尾張の大うつけから織田家の家督を継ぎ、美濃の国の主となって、桶狭間の戦い、稲葉山城の戦い、比叡山の焼き討ち、京都闖兵、天下布武……そして本能寺の大火。織田家の寵愛を受けない非嫡出の長子から天下布武の第六天魔王まで、浮き沈み、勢いのすさまじいものでした。彼がもう少し長く生きていたなら、天下布武は本当に実現できていたのだろうかと思えます。彼は曹孟徳やエカテリーナ大帝を想起させます。彼らがもう少し長く生きていたなら、また歴史は違っていたでしょう。もしかすると慧極まれば必ずや傷なうということが真理で、人生の無常も真理なのかもしれません。

周作人が翻訳した『平家物語』の中に、「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を享け、滅せぬもののあるべきか」という詩があります。この出典は幸若舞の名高い「敦盛」です。もとは熊谷直実が平敦盛の殉死に捧げた舞いの歌でした。一ノ谷の戦いの時、平敦盛は熊谷直実の手にかかって命を落としましたが、子供のころからの親しい友人が刀を抜き合ったことに熊谷直実が世の無常を感じ、この歌を作ったとのこと。この歌を知る人が多いのは、織田信長が桶狭間の戦いの前夜と本能寺の変の前に詠じたからです。もしかすると本当に予言となってしまい、彼は世の無常を笑って今川義元を葬り、世の無常を嘆いて燃えさかる炎の中で一生を終えたのかもしれません。

しかし噂は永遠に噂です。その夜の大火の中で彼が何を思い何を語ったのかは永遠に分からないかもしれません。ただ一つ確かなことは、彼の一生が本当に歌の中にあるようなものだったことです。

人生の五十年は、天と比べればちっぽけなものにすぎません。

世事を見ると、夢幻で水のようなもの。

人生は一度きり、死はすぐそこにあります。

それこそが菩提の種、思い悩む心、胸にあふれる思い

……

天下に目を向けると、海と空の間で滅びぬものはありません。

一度生を享け、滅せぬものあるべきか。

一度生を享けたものが生き続けることはないのです。